

令和7年度

自治と協働の職員研修報告

内容

1. 案内文書.....	2
2. 研修の趣旨説明.....	3
3. 滋賀県 高島市 市民協働課 兼田様の講話.....	3
4. ワークショップ発表内容（要約）.....	4
5. 講評.....	7
6. 研修後アンケート結果.....	8
7. 高島市研修資料（抜粋）.....	エラー! 参照するデータが見つかりません。
8. 研修の様子.....	エラー! 参照するデータが見つかりません。

1. 案内文書

事務連絡
令和7年11月12日

所属長 各位

職員課長

自治と協働の職員研修の開催について

- ①協働の基本指針改定に関連した職員協働研修を職員・市民の双方向で実施する。
- ②先進自治体の事例発表に基づき、例年通りグループワークで議論と課題を共有する。
- ③他市と比較することで本市の現在地を知り、各職域で「市民と行政の自治と協働の今後のあり方」を検討・発表する機会とする。

上記3点を目的に下記のとおり研修を実施しますので、貴所属職員への周知及び研修への参加についてご配慮いただきますようお願い申し上げます。

記

1. 日時・場所

令和7年11月25日 午前の部：9：30～11：30 午後の部：13：30～15：30
@教育文化会館3階第1研修室

2. 対象者

- 係長級の職員を含む各課2名ずつ（計90名程度）
- ※ 当該職員の出席が難しい場合は可能な限り代理の方の出席をお願いします。
- 橋本市の自治と協働をはぐくむ委員会委員（外部委員）

3. プログラム（時間は目安です）

	午前の部	午後の部
① 開会	9：30～	13：30～
② 滋賀県高島市 市民協働課 兼田さんによる講話	9：35～	13：35～
● 令和6年度協働のまちづくり推進指針の改定について		
● 改定後の指針を活かした市の事業展開		
● 高島市の現在の取り組み紹介		
③ ワークショップ	10：05～	14：05～
テーマ：高島市の兼田さんの講演から最も学べたこと 市民と行政の協働のために今1番必要なこと		
④ 発表	11：05～	15：05～
⑤ 講評	11：15～	15：15～
⑥ 閉会	11：20	15：20

4. 出席報告（締め切り：令和7年11月18日）

出席者は下記URL(LGWAN)もしくはQRコード(インターネット)から報告ください。

<https://tb.logoform.st-japan.asp.lgwan.jp/f/gtKQ1>



5. 問い合わせ先

地域振興室 今山（内線1903） 職員課 山口（内線1302）

2. 研修の趣旨説明

平田委員より説明。本研修は、はぐくむ委員会と地域振興室が議論して内容を決定しており、ワークショップの技法を用いて職員との討議を行ってきた。昨年は協働を具体的に実践し、広めることを目的に市の取り組みから3つの運用事例を発表頂き、それをまとめる研修会を開催した。今年は外部の優良事例として滋賀県の高島市から兼田様より高島市の協働のまちづくりについて講演頂く。

大いに学んで頂き、本市の取り組みと比較して市と行政の協働のために今、必要なことは何かを中心に話し合ってもらいたい。本日の研修が大いにプラスになるものと期待している。

3. 滋賀県 高島市 市民協働課 兼田様の講話

協働のまちづくりの先進事例として講話を依頼。高島市の協働の考え、協働のまちづくり推進指針の改定、高島市の協働事業についてお話頂いた。

【高島市の協働の考え】

- ・高島市の協働の定義は「市民と市民または市民と行政や事業者等が良きパートナーとなって、信頼関係の中で責任を担い合い、それぞれの特性や能力を発揮しながら、まちづくりという共通の目標に向かって連携し、育みあう関係」
- ・協働に取り組んだ背景は少子高齢化による行政の資財（人・もの・資金）の減少と住民ニーズの多様化。
- ・市民と行政の協働の目的は時間・資金・効果量などにおける効率的な課題解決。ポイントは①同じ目的・目標を持つ②対等な立場で連携・協力③それぞれの持ち味・特性を十分に発揮する。

【協働のまちづくり推進指針の改定】

- ・背景は5町1村合併後に策定された1次指針で目指した3つの課題が解決されていることと、市民活動に係る新たな課題（①広がり②関わり③継承）に対応していないこと。
- ・2次指針の目標は「協働が市民の日常として息づくまち」。市民が協働のまちづくりに関わる道筋をイラストで示し、現在の活動や気配りなどが協働のまちづくりに関わっているという気づきの機会を増やすこと。（図1）

【高島市の協働事業】

- ①指針の副読本の作成。コンセプトは中学生でも分かるもの。イラストは成安造形大学の学生に依頼した。また、湖西中学校3年生と副読本の素案で模擬授業を行い、市民活動を行っている個人や団体にも参加いただいて、その内容を副読本に反映させた。公民館等の施設や協働に関するワークショップを通じて配布した。
- ②中高生向けのまちづくりを実践できる学習プログラムの作成（予定）。中高生から地域課題や協働について考え、実践団体等との対話の機会を設け、課題・解決策を発表する。

- ③協働提案事業に対する補助金。限度額 50 万円で 3 年間継続可能。市民活動団体から地域課題解決の事業提案を募集し、市の所管課と協働で提案書を作成・プレゼンを行うもの。市との協働による事業継続をサポートする。
- ④中間支援組織の「たかしま市民協働交流センター」の設置。団体からの相談、設立支援市民・団体のマッチング等を行っている。日頃の活動発表の場として市民活動フェスタも実施しており、情報交換や他団体等との連携のきっかけにもなっている。
- ⑤高島市市民協働のまちづくり推進懇話会の設置（予定）。市民活動団体やその支援者を招いて、課題や意見を伺うとともに、行政や中間支援組織の事業についても意見を伺う。

研修資料

¥¥fslg¥fs¥☆業務共有ツール☆¥05_研修資料¥15_協働職員研修¥資料¥R7

【質疑】

- Q. 高島市の協働提案事業の具体例を教えてください。
- A. 長年続いている事業は限られるが、1つ目はファミリーサポートセンター事業。助けてほしい会員と助けてあげる会員を募り、要望に応じてつなぐもので委託事業。2つ目はフードバンク事業で公民館も一緒に実施している。3つ目は山間部における移動販売事業。
- Q. どの会や活動を見ても同じメンバーになっているという市民活動の広がりについて、その広がりには効果があった事例があれば教えてください。
- A. 交流センターに裾野を広げるような講座を依頼したが、新規の引き込みには至らなかった。子育て世代や若者をまちづくりに関わらせるのは引き続き課題となっている。

4. ワークショップ発表内容（要約） ※太字は発表者

テーマ：①高島市の兼田さんの講話から最も学べたこと。②市民と行政の協働のために今1番必要なこと

午前の部：11時05分～

【2班】花岡 真希(市民課)、井本 明(危機管理室)、帆足 恵実(出納室)

中村 宗治(子育て応援課)、表野 克也(農林整備課)

松山 泰久(はぐくむ委員)、森田 知世子(はぐくむ委員)

中学生に副読本で協働のことを伝えて、内容にフィードバックし、その方たちが大人になって自然と協働に触れる機会を増やすという取り組みは非常にいいと思った。また、橋っ子祭りやまっせ、自主防災組織、第2層など職種によって協働は変化するが、自然と協働に取り組んでいるのだという気づきもあった。

人口減少という課題に対して、現役世代にいかに関心を持ってもらうか、団体等との出会いの場を作って長所を引き出し、いかに巻き込んでいくかの広報が大事。

【5班】中谷 友亮(水道経営課)、東川 梓(こども課)、岸 真由美(学校教育課)

中村 峻(福祉課)

岸田 昌章(はぐくむ委員)、向 律子(はぐくむ委員)

高島市のすてきな点として、中学生向けの協働の授業や課の名前に協働が入っていること、時代に合った指針の見直しに取り組んでいることが挙げられた。課題は少子高齢化の中で、共通の目的、繋がり、お互いの特性の理解をどうしていくかが難しいこと。今必要なことは働き盛り世代にそのスタイルに応じた協働の取り組みを行ってもらうこと。参加だけでなくアンケート回答も協働であり、橋本市の一員としての取り組みと思ってもらえれば、今度の参画の下地になるのではないかと考える。

【1班】石井 富美夫(都市整備課)、竹村 せり子(下水道課)、中谷 裕司(企業誘致室)

美濃 喜英(まちづくり課)、渡邊 貴志(家庭教育支援室)

中川 多賀子(はぐくむ委員)、上原 慎太郎(地域振興室)

最も学べたことは市民と行政が目線・歩調を合わせていくということ。この点が協働しやすい環境づくりに繋がる。課題は世代間の継承と事業の継続性が挙げられた。必要なことは中高生など若い方のまなびの場、世代間交流の場を設けて協働の機運を高めることだと考える。

【3班】前原 一太(総務課)、伏尾 一人(農林整備課)、植木 慎哉(農林振興課)

堂浦 泰樹(消防本部)、山崎 由佳(いきいき健康課)

米坂 薫(はぐくむ委員)、東 美樹(はぐくむ委員)

講話からは協働のハードルを下げるための「気づき」と「分かりやすさ」に注目した。気づきはすでに参加している身の回りの協働に気づくことが大切であること、分かりやすさは兼田さんの資料にもあったドラクエに例えた説明やイラストを用いたアピールが分かりやすと感じた。必要なことは、協働がなくても生活は成り立つという前提のもとで、まずは自分のことは自分でする、次に周りを巻き込む、それでも難しければ行政に聞くという仕掛けづくりが大切だと考える。

【4班】坂田 緑(人権・男女共同推進室)、大萩 光司(政策企画課)

中岡 由依(生活環境課)、楠 大樹(消防本部)、角田 達則(水道施設課)

福澤 稔(はぐくむ委員)、今山 知紀(地域振興室)

学べたことは協働のきっかけづくりとして、日常生活の小さなことからでも始めること。課題は関心を持ってもらうことや同じメンバーで広がりがいいこと。今一番必要なことは協働のイメージを持ってもらえる情報発信と参加・繋がり場を設けることだと考える。

- 【6班】上田 忠弘(水道施設課)、吉野 翠(税務課)、平田 通 (教育総務課)
曾和 睦雄(介護保険課)、岸本 悠希 (水道経営室)
平田 敬二(はぐくむ委員)

学べたことは橋本市でもあるなというものを挙げた。市民・職員も協働を知っているのか、取り組みづらいという壁があるのではないか、次世代継承が大切ではないかという意見が出た。解決策として、市民・職員でも情報を共有し、地域あった取り組みをするなかで、地元企業も巻き込むなど1つのチームになって取り組んでいくことが大事だと考える。

午後の部：15時05分～

- 【2班】和田 晃三(選挙管理委員会事務局)、延利 拓紀(下水道課)、米坂 彩 (出納室)
前川 晃次 (農林振興課)、和田 麻紀 (こども課)
森田 敏之 (人権・男女共同推進室)
向 律子(はぐくむ委員)、戸島 浩子(はぐくむ委員)

最も学べたことの意見として、対等な立場で市民と行政が目標を共有して協働により相乗効果を生み出し、市民が気負わずに協働を意識できるようにしていくことが挙げられた。働く世代を巻き込むことや委員の重複などの課題に対する今1番必要なこととして、若者に橋本市を良くしたいという気持ちを持ってもらう、こどもの頃から協働の意識作りをしていくことが挙げられた。

農林振興課では農家さんと一緒に野菜作りをしており、実際にやってみる事例を増やしていくことがいいのではと考える。

- 【3班】森口 祐巳子(企業誘致室)、大塚 遼(政策企画課)、大木 剛(建築住宅課)
室 貴彰(産業振興課)、植山 真智 (建築住宅課)、倉谷 真祐子 (税務課)
福澤 稔(はぐくむ委員)、上原 慎太郎(地域振興室)

高島市の話で特に印象的だったのは中学校での授業の話で、子どもの頃からまちづくりに参画する経験をするのが、まちへの愛着に繋がると思う。課題として周知・関心・人材不足により縦割り行政や個人では協働参加のハードルが高いということが挙げられ、1番必要なことは知ってもらう、参加してもらうことであると考えます。

提案として中高生に協働のPR動画を作成してもらい、コンテストを行ってはどうか。動画作成による協働の勉強と協働のPRができ一石二鳥になると考える。

- 【1班】大西 一海(生活環境課)、伊藤 裕規(都市整備課)、山本 裕美子 (保険年金課)
高瀬 哲也(危機管理室)、澤渡 佑太(いきいき健康課)
米坂 薫(はぐくむ委員)、今山 知紀 (地域振興室)

最も学べたことは市民と行政の協働提案事業で、そのような取り組みもあるのだと気づかされた。課題はサポセンや先ほどの班の農林振興課の取り組みを市民や行政職員に共有する場がないこと。1番必要なことは若年層の育成で、若い世代からこれらの取り組みを教育・PRしていくことが必要と考える。

【4班】 繁野 範子(保険年金課)、福山 揮一(まちづくり課)、中谷 正(福祉課)

小林 拓也(子育て応援課)、池上 梨沙(産業振興課)、坂部 太亮(秘書広報課)
東 美樹(はぐくむ委員)、平田 敬二(はぐくむ委員)

テーマに関しての意見出しに終始した。最も学べたことについては、「市民協働課」という名前がいいといった「協働とは」に10件、「高島市の取り組みについて」が9件、「課題解決に向けて」が11件、「橋本市と共通の課題」が2件の意見が挙がった。

今1番必要なことについては、「目標を決める」が10件、不要なものは止める。参加の障壁を下げるといった「取り組み」が21件、行政や市民にいいことをアピールする「うまみ」が8件挙がった。

5. 講評

○ 午前の部：11時20分～

去年よりはいい発表であった。初めて他市から講師をお招きしたが、皆さんに良いと思ってもらえれば自分たちも嬉しく思う。

そもそも協働は言葉を知らなくても、協働的な取り組みをしている例はたくさんある。協働の基本はwinwinの関係。現役世代は子育てや就職、いじめなど課題はたくさんあり、関心がないわけではないと思う。行政だけで課題を解決できる時代は終わっており、家族や学校などの協力があって過ごしている。岸和田で盛んなだんじりも上意下達や怖いイメージがあるが、あれも世代間の協働事例である。

最近の地域づくりの考え方で共創(コ・クリエーション)という言葉がある。様々な立場、世代の人たちの力を借りて、自分たちのまちを住みよいまちに創り上げていくというもの。協働という方法を用いて、繋がりをつくり、自分たちの思いを具体的に地域や生活の中にも実現していく「共創」が実現できれば、そのプロセスに豊かな協働があると理解してもらいたい。

○ 午後の部：13時30分～

各グループが肩の力を抜いて言いたいことを言えており、発表も一番気持ちよく聞けた。他市の自治体職員の協働に関する話を聞いてみるのもいいと思う。何でも行政ができる時代は終わり、協働が当たり前になっている。市民と行政が

winwinの関係でお互いに力を貸し合い、信頼を得て取り組むことが一番の鍵になる。

今、もう一度市町村合併を進めるという流れがある。職員と市民がともに地元を愛し、学び・励まし合って地域課題に取り組むところが成功し、要求だけの市民と危機感のない職員の自治体は取り残されるだろうというのが私の考え。

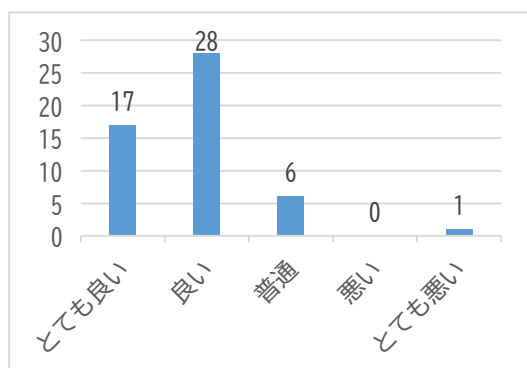
ここに至るまで時間は掛かったが、今日の研修で市民が溶け込んで一緒に話し合っていたのは非常に嬉しい。

年配者は若者を理解しようとし、若者はこれからを支えられるような人がたくさん橋本から育ってほしいと思う。職員もどんどんスキルアップしてほしい。はぐくむ委員会のキーワードに「橋本愛」がある。橋本のいいところも悪いところも皆に気づいてほしい。行政にボランティアで参加している市民がたくさんいることを私は誇りと可能性に思いたい。

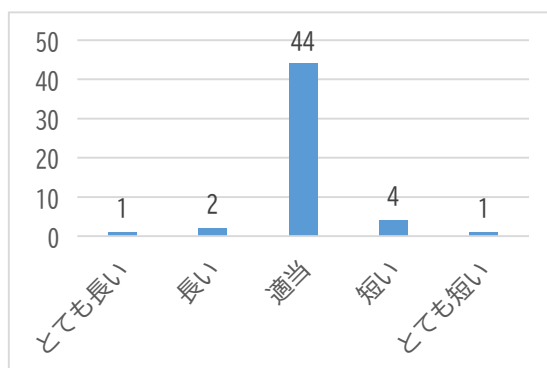
6. 研修後アンケート結果

自治と協働の職員研修終了後、職員及びはぐくむ委員に対して振り返りアンケートを実施しました。なお、「④高島市が考える協働について印象に残ったことはありますか」以下の内容は原文のままになっています。

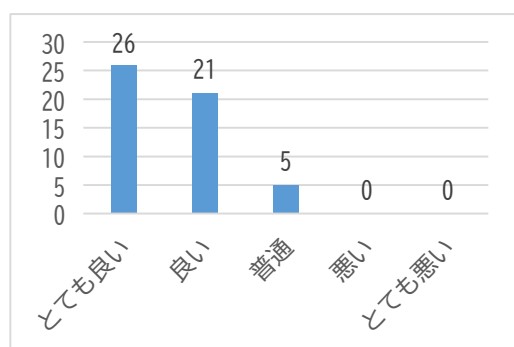
① ワークショップの内容はどうでしたか？



② ワークショップの長さはどうでしたか？



③ 高島市の講話内容はどうでしたか？



④高島市が考える協働について印象に残ったことはありますか

- 行政だけではなく、住民と一緒に事業や今後の市のあり方を考えていく意識が強く、そのための仕組みづくりなどの取り組みが印象に残りました。
- 行政が主導するのではなく、市民・団体・事業者それぞれが対等な立場で役割を担い、地域課題の解決を目指す考え方が印象に残りました。協働を「手段」として捉えている点が、実践的だと感じました。
- 同じ目標を持ち対等な立場で相手の特徴を理解し協働を進めることで効果的な課題解決に繋がれるという話が印象に残りました。
- 目指す先が、日常生活の中に溶け込める協働という言葉が印象に残りました。また、協働を進めた先にある、市民活動の継承・継続のための裾野を広げる活動にも力を入れていらっしゃる事が印象にのこりました。
- 気が付けば協働のまちづくりに参画しているという考え方が、市民にとって参画へのハードルが低く感じられる考え方で素敵でした。
- みんなで活動をおこしてみる、しゃべってみる、積み重ねるといってお話があり、同じ目的をもったものが集まってしゃべることの大切さを改めて感じました。

⑤高島市の協働指針改定について印象に残ったことはありますか。

- 時代の変化や地域課題の多様化を踏まえ、実態に即した形に見直されている点が印象的でした。形式的な指針にとどまらず、現場で活用されることを意識した改定だと感じました。
- 誰にでもわかりやすく理解してもらうため、「協働のまちづくり」について各段階で整理されているところが印象に残った。
- 市民一人ひとりに焦点をあて、「協働が市民の日常として息づくまち」を目標としていることが素敵だと思いました。気付かずに関わっていたけれど、実はそれが協働であり人との繋がりやまちへの関心が広がって、いつの間にかみんなでまちづくりをしているというのはまちのあるべき姿、理想的な状態だと思います。強制されてするものではないし、皆がこうしたいとふんわりでも同じ方向に向かって共に歩んでつくりあげていくものだと思います。
- 多様なスタイルを取り入れて現実に即した改定をされていて良いと思った。私自身も子育て世代であるが、ライフスタイルに応じて色々な協働の形を提案してもらえると参加しやすいと感じた。

⑥高島市の協働の取り組みについて印象に残ったことはありますか。

- 協働取組事業で毎年2, 3個採択されているが、現在残っている事業は3つでファミリーサポート、フードバンク、移動販売ということであるということが印象的でした。橋本市も全て取り組んでいる事業であり、橋本市は移動支援なども取り組んでいる

ため、似たような事業をしている自治体であり、また、広範囲に居住地域が及び特性からも、互いに学び合えることが多いように感じました。多様性が認められたり、働き方改革が促され無理をせず働くという考えも広まる中、それに反比例して、行政では幹部職員、地域では多くの事業に重複して携わる方々の負担が多くなってきている気がします。人口が減る中でしなければいけない事業が増え、話し合いも増えというのは次世代にも繋ぎにくい気がしますので、残すもの残さないものの精査や、携わってもらいたい方々へのメリット提示、中心人材の掘り起こしは大切なことと感じました。

- 市民や地域団体の主体性を尊重し、行政が伴走する形で取り組みを進めている点が印象に残りました。小さな取り組みを積み重ねながら、信頼関係を築いている点が参考になりました。
- 地元の学校でのワークショップ。こどもを巻き込むことの大切さが印象に残った。
- 副読本の作成に中学生を参加させ、次世代にわかりやすく、興味を持ってもらうきっかけづくりを行ったこと。実際に行うと非常に時間がかかるでしょうが実施されたことは素晴らしいと思います。

⑦その他意見

- 研修の対象者が係長級は必須となっていることについて、係長級が多い課は毎年違う人を対象とすることができ、多くの方が協働について学ぶ良い機会となる。一方で、人数が少ない課や室では、特に係長級が1人のみである場合、人事異動がない限り毎年同じ人が研修に参加することになる。
- ワークショップに参加いただいたはぐくむ委員の方も話しやすく進めやすかったです。
- 消防では協働を知らない・関係がないと思っている職員が多いと思うので全職員対象とした職員研修で知ってもらう機会を作っていただけたらと思います。
- 他市の事例があると、自身の市との比較や参考になることが多く、良かったです。
- 講師の先生がとても熱心な方という印象を受けました。
- 改めて自分がしていたことも協働の一部にはなっているのかなと思うことなどもあり、今後も地域の発展のために参加していけたらと思います。人権研修は職員全員が参加ですが、協働研修も全員参加、小中高大学生にも授業があれば大変有意義なものになる気がします。自助公助共助はよく聞きましたが、協働はあまり習ってこなかったと思います。
- 市民の方と一緒にあって、ワークショップをする機会がなかなかなく、とても良い機会となりました。また協働について、向き合い、考える機会があることはとても重要であると考えておりますので、本当に有意義な研修でありました。